

平成25年11月30日

公益財団法人
船井情報科学振興財団御中

シカゴ大学経済学研究科
潮田佑

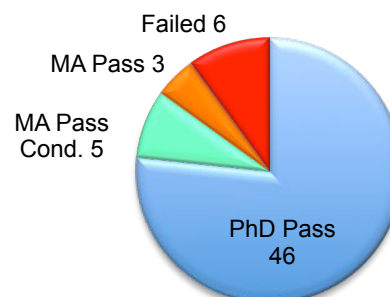
2012年度派遣奨学生第三回報告書

シカゴは短い秋が終わり、しばしば最低気温が零度を下回るようになりました。新学年も始まり生活に少し変化がありましたので、前回の報告書以降のシカゴでの学習と生活の状況を報告させていただきます。

1. コースワーク

前回の報告書では「コアコース」と呼ばれる経済学大学院一年目の基礎科目群について記しました。そのコアコースの成果が試される進級試験が七月末に行われ、博士課程一年目の学生の他に、昨年落第した再挑戦組や先取りをしている優秀な学部生などを含めて60名が受験しました。私はこれに合格し、二年目を無事迎えることができました。

実は合格発表として受験番号ごとの結果一覧が送付されるので、受験者全体の合否状況が分かります。以下のグラフが示す通り、6名が落第、3名が修士課程修了資格のみ獲得（博士課程進学要件は満たさず）、5名が条件付き合格（三科目のうち計量経済学のみ再履修）という結果でした。この合計14名のうち、今回が初挑戦だった学生は来年同じ試験を受験し、それでも合格基準を満たすことができなければ、博士課程を去ることになります。コアコースの厳しいことで有名なシカゴ大学経済学部ですが、数字を見るかぎり、二年連続で落第して退学に至るケースは、かなりまれになっ



進級試験結果内訳

てきているのは事実のようです。ただし、もちろんこれは二年連続で同じ科目を履修することに精神的に耐えられれば、の話です。落第した学生のうち数名がプログラムをすでに去ったとの噂を耳にしています。

さて、一年目の基礎科目群であるコアコースを無事終えた学生は、今度は二年目の専門科目である「フィールド」のコースワークを取らなければなりません。自らの専門分野として二科目を指定し、通年でこれらの授業を履修します。通常は GPA3.0 を満たすか、それに加えて論文審査にパスすることでこのフィールドのコースワーク合格とされます。多くの学生はこれに加えて、専門分野外の授業も毎学期一つか二つ履修します。私は今学期、産業組織論・ファイナンス・ミクロ計量経済学の三科目を履修しています。

さらに、Ph.D. candidate になるために、今年から上記のフィールド・コースに加えて、三年目の年末までに論文を一本仕上げなければならないことになりました。ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学などの学生と比べて研究を始めるのが遅いことを教授陣が憂慮し、取られた措置だと思われます。この制度変更により、二年目の学生は漫然と授業を受けるだけでなく、常に研究のことを念頭に置かなければならなくなりました。

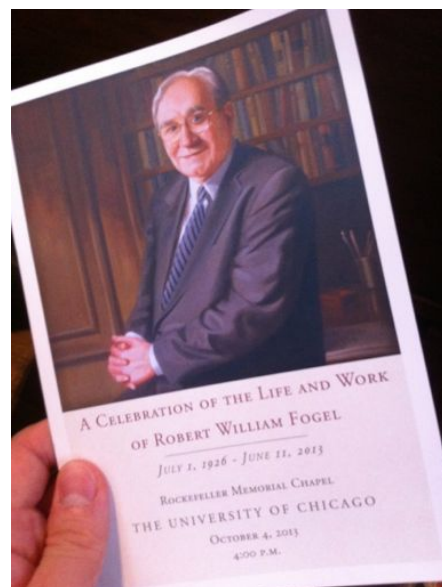
2. ノーベル賞と教授陣の死去

今年シカゴ大学の経済学部とビジネス・スクールにとって特別な年となりました。それぞれに所属するラース・ハンセン教授とユージン・ファーマ教授がノーベル賞（正確にはノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞）を受賞したからです。私は昨年度にハンセン教授の計量経済学を、今学期はファーマ教授のファイナンスを受講しています。

私は特にファーマ教授の授業を受けて、ファイナンスのイメージががらりと変わりました。ファーマ教授が教える資産価格決定理論について、「数学をバリバリ使って複雑なモデルを扱う金融工学の一つ」という程度のイメージしかなかったのですが、ファーマ教授はシンプルなモデルを使って多くの実証を行うことを何よりも重視しています。授業ではモデルの英語による理解を重視し、論文の分析結果の表をスクリーンに映しながら教授が口頭で次々と説明します。（それが留学生にとって辛いところでもあるのですが。）課題は簡単な回帰分析を何本も行わせるものがほとんどです。



シカゴ大学はまた、今年ロバート・フォーゲルとロナルド・コースという偉大な教授2人を相次いで失いました。フォーゲル教授はデータを用いて経済史を分析する大家として、コース教授は「法と経済学」という分野の実質的な創始者としてノーベル賞を受賞しています。私は両教授と面識はなかったのですが、学内のチャペルでフォーゲル教授の追悼式が催されたので、これに参列してきました。元教え子や同僚が、時に笑いを交えつつ教授との思い出を語ったのですが、その中で、彼らが異口同音に述べたエピソードが、夜通し研究のアイデアを教授と語り合ったというものです。人々が手にしたデータをもとに、議論に熱中するさまが目に浮かぶようでした。



3. 今年に入って意識すること

上記のような特別な場合以外にも、学内セミナーには毎週のように他大学の一流研究者が発表しにくるなど、アカデミアに大きな影響を残した学者の存在を身近に感じる機会がしばしばあります。しかしながら、ひょっとすると今後の人生において、このように著名な教授陣とカジュアルに接する機会はそうそう与えられないかもしれない、とここのところ強く感じています。というのも、現在はオフィスアワーに押し掛ければ思いついたばかりの研究アイデアを聞いてもらえますし、ファカルティも参加する学生セミナーでは荒削りな研究も歓迎されています。しかし将来的には、例えアカデミアに就職したとしても、一線級の研究者に話を聞いてもらうチャンスは、(自らも超一流の業績を残して親しい同僚となることを除けば) 正式なセミナーやワークショップにおいて発表するほかないだろうと思われるからです。相対的に容易にチャンスをつかむことのできる機会はほんの数年であることを意識して、ファカルティとどんどん接触しようと思っています。

また、上級生の話を聞くにつけ、いかに早くから研究に取りかかるかが、最終的な博士論文のできを大きく左右することを痛感させられます。一年目のコアコースと比較して、フィールドのコースワークに落第する確率は比較的低いと言われているので、今年はなんとか自分の研究のための時間を捻出しようと考えています。

以上ご報告とさせていただきます。末筆ではございますが、このような機会をいただいたことを改めて感謝し、今後とも勉学・研究に励む所存です。季節の変わり目ですが、財団の皆様もお体に気をつけてお過ごしください。